



ライブハウス「ウイステリア」にて(2008年5月)

多くの間を置きながら、ひとつひとつ言葉を紡ぐように話す久ぼたなお子さん(31)。それがギターを抱えて歌いだすと、すっ—と一直線に突き抜けるような硬質な声音で、胸の内をストレートに詞に乗せていく。2006年「ザ・ストリートミュージックジャンプ」(現ザ・ミュージックジャンプ)OSAKA)でジャンプに輝き、翌年にはメジャーデビュー。その喜びは「やっと最近、実感として湧いてきた」とゆるりと噛み締めている。

引っ込み思案のボーカル

小学校では鼓笛隊でシンバルをたたき、中学校では吹奏楽部でトランペットを吹いていた。歌は家族でカラオケに行く程度だったが、大学の軽音楽部に入学して自らボーカルを志願。「人前に出るのは苦手だったのに、なぜボーカル?」と周りに不思議がられながらも、一気に音楽の世界に引き込まれていく。

大学卒業後は友達を誘ってユニットで路上ライブを始める。「恥ずかしくて長いこと帽子を深くかぶって歌っていた。聞いてほしい反面、聞いて下さると恥ずかしかったり」。5年続けてゆっくりと度胸をつけ、今度はひとりでギターの弾き語りを始める。

アルバイトをしながらライブハウスにも活動の場を広げていくが、三十路を前に踏みとどまった。「ほんまに歌っていきいたいんか? 惰性でできてるんちゃうか? という思いが強くなり...」。考え抜いた末、「歌を止めよう。きちんと身を固めて、親を安心させよう」という結論を出した。その前に、「最後の記念になれば」と、このコンテストに応募し、思わぬ展開が待っていた。

とんとん拍子にデビュー

同コンテストは才能あるミュージシャンの発掘、大阪からの発信を目的に2002年から毎年秋にかけて開かれている。06年には全国から516組が応募。その中から音源・ライブ審査を

通過して決勝大会に進み、オリジナル曲「やさしいひと」を歌った。

結果はなんとグランプリ。「すごく大きな舞台上、夢の中の出来事みたいだった。受賞者の発表の時も自分の名前が呼ばれているのに全然気付いていなくて、隣の人に肩を叩かれて慌てて飛んで行った」。それから翌日の音楽祭まで、あまりの驚きで記憶はほとんど残っていないという。

最後の挑戦が、プロのミュージシャンに向かうスタートとなった。翌年にはマキシシングルをリリース。浪花レーベル「シュライカー」の第1弾アーティストとして、期待も背負っての“まさか”のデビューも夢心地で迎えた。

恋歌から子守唄まで

「あんまりやさしくしてくれるから、いつまでも忘れられないの」「好きになるほど重みが増して、追いかけるほどに遠くなるのが恋というもの」。オリジナル曲は切ない恋をつづったものが多い。いろいろな実体験を基に想像を膨らませてつくっていくというが、気が付けば恋歌ばかりが並ぶ。

オリジナルと並行して、今年から作詞家のみず唱平氏に勧められて子守唄も歌い始めた。「唄の背景を知ると、自分みたいに甘っちょろい人間が歌っているのになっていうくらい、すごく深い意味があったりする。ちょっとでも、子守っ子の気持ちが分かるような人間になれたらな」

デビューして1年。「未だに緊張しいであかんたれ」と顔を歪ませるが、「そんなこと言ったらあかん。自分に甘いだけや。厳しくならな」とぐいっと背筋を伸ばす。掴み取った道を、踏み固めていくのも自分自身。「難しいことやと思うけど、永く愛してもらえるような曲を歌っていける歌手になりたい」。もう迷いはない。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

質朴な シンガー ソングライター

プロフィール

久ぼたなお子さん



1977年、京都府宇治市生まれ。大学卒業後路上ライブを始め、京都や大阪を中心にシンガーソングライターとして活動。2006年秋、服部良一記念大阪音楽祭「ザ・ストリートミュージックジャンプ'06」(大阪音楽コンテンツ創造事業実行委員会主催)でグランプリを受賞。07年7月、浪花レーベル「シュライカー」からマキシシングル「やさしいひと」をリリース。10月中旬からネット配信開始。

HP <http://www.shriker-music.com/naniwa/kubotanaoko/>